２０２４．３．１０．主日礼拝説教

聖書： マタイによる福音書9章27～31節

『 正しい理解を持つように 』

「二人の盲人をいやす」という小標題が掲げられます。いわゆる奇跡物語を軸にして編集された8～9章もようやく終わりに近づきました。本日の物語は終わりに位置している関係で、それまでの総括的な意味合いを込めて三つのモティーフを含んでいます。

第一は、先行の物語(18-26)と同じく、癒される側の信仰がクローズアップされるモティーフです。彼ら・彼女らの懇願に対し、イエスはすぐには応じません。群衆のざわめきから離れ、互いが「わたし」と「あなた」という向き合い方を通し、その真剣さと信仰を確かめます。そして、ハッキリした

返事を得た上で彼ら・彼女らを癒すのです。癒しとは信仰を契機とすることを教えるのです(29)。つまり、それまでの理解とは、自己の問われや変革なしに癒しは獲得(購入)出来るというシステム中心の考え方に対し、マタイは「人」を中心に据え直すのです。

第二に、癒される人々はイエスに向かって「ダビデの子」と呼び掛けます。マルコとルカでは4回しか使用していないのに、マタイは10回も用います。マタイはキリスト論的告白を意味するこの言葉を好んで使ったのです。もともとこの言葉は、旧約の昔、預言者ナタン(サムエル下 7;12以下)の預言に遡ります。ユダヤ教ではダビデの家系から現れるメシア王が待望されていました。それは力によって他民族を支配し、イスラエルに栄光を回復せしめるメシア像でした。しかし、マタイでは「ダビデの子」との懇願の声が響くところには、必ず病いを癒す奇跡の場面が用意されているのです。つまり、それまでの力による支配をもたらすユダヤ教のメシア理解を批判し、マタイは病いに苦しむ人々に寄り添うメシアとしてのイエス理解を前面に押し出すのです。

第三に、この記事はマルコ10;46-52から得ています。並行記事はマタイ20;29以下と本日の箇所です。両方とも目の不自由な人がイエスに「ダビデの子」と懇願して癒されます。マタイはマルコの記事を二回用いているわけです。それも本日の箇所ではマルコのオリジナルな記事のエルサレム途上の文脈まで無視して初期のガリラヤでの活動に置いています。これは、メシアとしての働きは目の不自由な人を癒すことで明らかであるという主張を裏付けるためでした。つまり、11;5の「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている」という教えの裏付けなのです。そして、この11;5の勧告こそが福音の「正しい理解」なのだとマタイは宣言するのです。

信仰の批判とは幻想に過ぎないということかと思います。しかし、人の心を自由にし、思いやり深く生かしめるものなら幻想であってもよいのです。自己本位に目的追求を第一義にする商いのような信仰だったらいざ知らず、他者と共に生きようとする信仰なら、幻想として斥けるよりは、人生への真剣さとして評価すべきでしょう。

マタイはそのような迷いに翻弄されるわたしたちに対して美しい幻想を提案するのです。彼の関心とは政治や商売ではありません。それはただ一つ、癒された病いの人が喜びと感謝の笑顔と気持ちをもって生き直す現場に携わることなのです。これが福音への「正しい理解」なのでしょう。